7-13 魚

琵琶湖には現在約45～50種の在来魚が生息しています。その大きな特徴のひとつは17種にものぼる琵琶湖・淀川水系の固有種（亜種も含む）の存在です。琵琶湖は長い歴史をもつ湖であるため、他では見ることのない固有種が誕生したほか、古くからいた種が最終的に琵琶湖にのみ残り、固有種になったといわれています。

1. 多くの淡水魚がすむ琵琶湖

現在、滋賀県には85種（亜種を含む）の魚類が生息しています。この中には、オオクチバスやワカサギなど、国内外からの外来種が含まれています。これらを除いた在来種は71種で、そのうち琵琶湖（内湖を含む）には45～50種が生息していると考えられています。琵琶湖に生息する在来魚の種数は、日本に生息している純淡水魚の約35％を占めており、まさに琵琶湖は全国的に見ても「淡水魚の宝庫」といえる存在です。

2. 琵琶湖に生息する魚類とその特徴

琵琶湖にすむ魚類の最大の特徴は、ビワコオオナマズ（写真7-13-1）やニゴロブナ（写真7-13-2）に代表される固有種が多いことです。固有種が琵琶湖の在来魚全体に占める割合は30％以上に達しており、これほど多くの固有種が存在する湖は国内では他に例がありません。琵琶湖は、400万年という世界的にも有数の歴史をもつ古代湖であり、この長い歴史と特徴的な環境が、琵琶湖の固有種を生み、また存続させてきたと考えられています。現在、琵琶湖固有種には2つのタイプがあります。

（1）現在の琵琶湖の環境で進化した魚類

約40万年前に現在の形となった琵琶湖では、魚たちが沖合いや岩場といった特徴的な環境に移りすみ、そこで独自の生活様式を獲得しながら新しい種や亜種へと進化していきました。ビワヒガイやスゴモロコはもともと周辺の河川に生息していた祖先種が現在の琵琶湖で進化したものと考えられています。

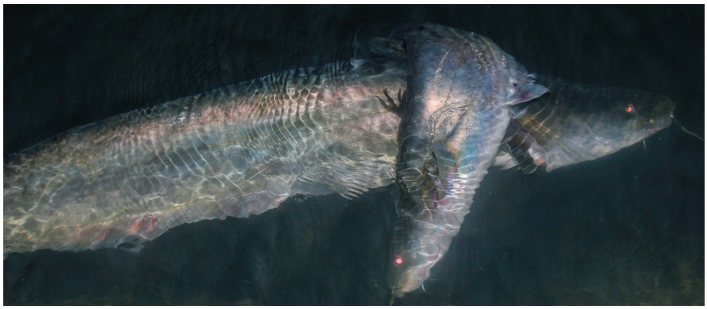

写真7-13-1 ビワコオオナマズの産卵

(2)長い歴史の中で琵琶湖に残った魚類

現在の琵琶湖が成立する以前からすでに種分化が起こり、長い歴史の中で最終的に琵琶湖にのみ生き残った種です。ビワコオオナマズやゲンゴロウブナ、ワタカ(写真7-13-3)がその代表であり、これらの種は「遺存固有種」と呼ばれています。

写真7-13-2 ニゴロブナ

また、固有種ではありませんが、琵琶湖にすむアユは約10万年前の気候変動により琵琶湖に閉じ込められ、海に生息するアユとは異なる独特の特徴をもつようになったと考えられています。琵琶湖でくらす個体は小型でコアユと呼ばれ、多くの人に親しまれています(写真7-13-4)。さらに、DNA分析による研究から、琵琶湖には2種類のコイが生息しており、そのうち野生型と呼ばれるコイは従来から日本にいる在来のコイであることがわかっています。

写真7-13-3 ワタカ

写真7-13-4 アユ(コアユ)

3. 琵琶湖の魚を支える琵琶湖の多様な環境

琵琶湖には、広い沖合いをはじめ、砂浜、岩場、植生帯などで形成された湖岸など、多様な環境が存在しています。また、その周辺には、内湖、河川、田んぼなど様々な水辺が存在しています。琵琶湖固有種の多くも湖岸や周辺の水辺に移動して産卵を行ないます。そのため、琵琶湖の魚にとっては、周辺にある水辺環境も非常に重要な場所となります。さらに、これらの水辺にはオイカワやタナゴ類など他の地域に広く分布する種も多く生息しており、琵琶湖の魚類相をより豊かにしています。種類が豊富な琵琶湖の魚は漁業や食文化、水辺遊びの対象として、私たち人間とも深い関わりを持っています。

4. 琵琶湖の魚類の現状とこれから

琵琶湖は、人がその周囲に住み着くはるか昔から多くの魚を育んできました。しかし、様々な人間活動により、この40～50年の間に固有種を中心とした魚類が著しく減少しています。特に生息環境の改変や生態系に影響を与える外来生物の増加等は、湖の生態系を大きく攪乱させ、多くの魚類の減少要因となっています。私たちは水辺環境の復元や外来生物の防除など様々な保全や再生の取り組みを通じて、かつての豊かな琵琶湖を取戻し、後の世代に引き継いでいくことが求められています。

琵琶湖博物館　**金尾 滋史**